

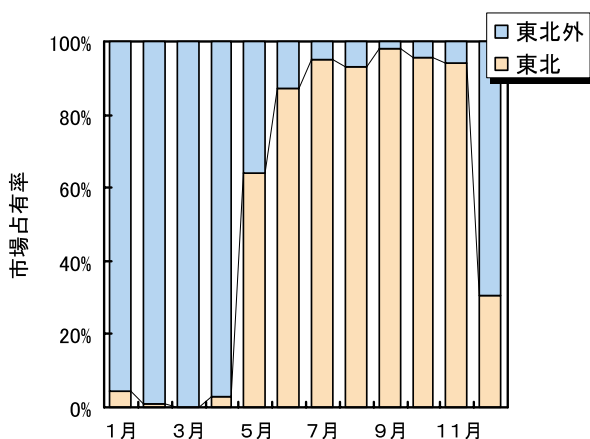
寒冷地・積雪下における 冬春期野菜の安定生産技術の開発

—平成17年度農林水産研究高度化事業—

《背景とねらい》

最近、農産物を産地直売所で購入する機会が増えているようです。しかし、東北では冬場の低温・積雪条件のため野菜の栽培が困難ですので、冬から春にかけての時期、一般的に野菜の生産が激減し、しかもその傾向は最近強くなっています（図）。そのため、産地直売所や大型量販店などからの地場産野菜を周年供給してほしいという要望に応えられてきませんでした。そこで、冬春期の産地消費型野菜を安定生産するための新たな栽培技術を開発することが求められています。

今年度から3カ年計画で開始した「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」地方領域であるこのプロジェクトでは、野菜の中でも産地消費型としての性格の強い葉菜類および根菜類を対象として、東北の厳しい冬期間において、必要最小限のエネルギー投入、もしくは積雪を積極的に利用する方法等による安定生産技術の開発研究を進めます。



図：仙台中央卸売市場における東北産ダイコンの市場占有率 (平成14年)

《研究の内容・特徴》

1. 露地で栽培された根株を掘り上げ、これを温床に伏せ込み萌芽させて収穫する冬期伏せ込み栽培



積雪下のキャベツ (大曲市における現地検討会から)

の方法は、最小限の暖房ですむ点で有利であり、東北の広大な土地を上手く活用した技術ともなります。アスパラガスを対象として生産技術の安定化を図るとともに、その他の品目についても適用性を検討します。

2. 多雪地帯においては、キャベツやダイコンなど結球野菜や根菜類を雪の下で長期貯蔵し、これを随時収穫していく方法で冬期から春にかけて継続出荷する方法が、小規模に行われてきましたが、これを安定的な技術として確立させます。雪の下で越冬した野菜はおいしくなるといわれていることについても詳しく品質を調査して実証します。また、融雪後速やかに伸長する生育の早いネギやホウレンソウといった品目を利用した春どりの作型についても検討します。
3. 施設利用を前提として、空気膜二重構造、チューブハウスなどの新しい機能性を持つ資材を利用した保温性の向上、あるいは太陽光・風力などの自然エネルギーの利用について検討し、栽培施設そのものの改善を図り、冬春期生産の一助とします。
4. 参加する研究機関は以下のとおりです。
東北農研センター、岩手農研センター、宮城県農園研、秋田農試、山形農総研センター、岩手大、秋田県立短大、東罐興産(株)

(野菜花き部 野菜花き栽培研究室 山崎 篤)